

本墨流し染

suminagashi

『墨流し染め』は縁起もの

墨の黒。「水に墨（くろ）を流す」と「苦勞（くろう）を水に流す」をかけた意味があり、昔から愛される縁起をかついだ文様です。

今でも、ある地方では和紙に墨流し染めをし、嫁入り道具にしのばせ「娘が嫁ぎ先で苦勞をしないように。苦勞が流れるように。」との慣しが伝えられています。

『墨流し染め』の歴史



寛永御世三十九人更張 對馬藩御用子書



平安時代

墨流しの始まり

墨流しという技法は、1300年前の平安時代の貴族が川に墨を流し模様の変化を楽しむ遊びを起点としています。そののち、墨と松やにを用い、その模様を紙に写しとり、和歌を書くようになりました。



江戸時代～近代

紙から布へ

墨流しの技法を応用した多様な色や模様の料紙が生産されるだけでなく、布帛など、様々な領域に応用され、愛されてきました。近代になると紙が主だった墨流し染めを、布にも染められるように八木徳太郎が技術を改良しました。その後、京都高等工芸学校（現：京都工芸繊維大学）色染科教授の鶴巻鶴一や、教え子の亀井光三郎がそして友禅染の日比野治三郎が譲り受け、さらに研究を重ねていきます。



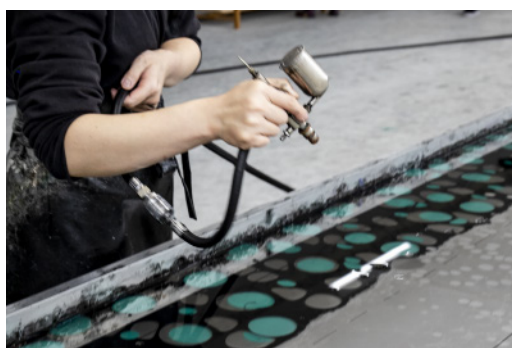
現代～

京友禅の墨流し

墨流し染の染色技法の変遷の延長上に、現代の名工として活躍した藺部正典氏が創り出す現代の墨流し染があり、現在、藺部染工事業部が想いを受け継いでいます。十数メートルを一度に描き、生地につしとるのは、繊細な神経と熟練した技が必要で、現在でも描くことができるのはごくわずかな職人だけです。

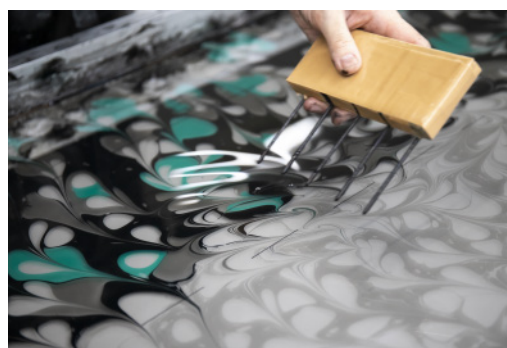
『墨流し染め』ができるまで

「墨流し染め」は、水面に浮かした墨汁で波紋上の模様を作り、それを布に転写して染め上げる技法です。現在は、墨の代わりに顔料を使用し、様々な色彩を出して染める事が可能になっています。



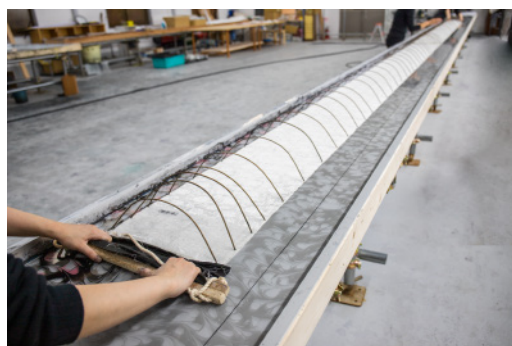
1 水面に色を浮かべる

17m の水槽の水面に、色彩豊かな顔料を浮かべていきます。
この時、完成する紋様を想像して、色をのせていきます。



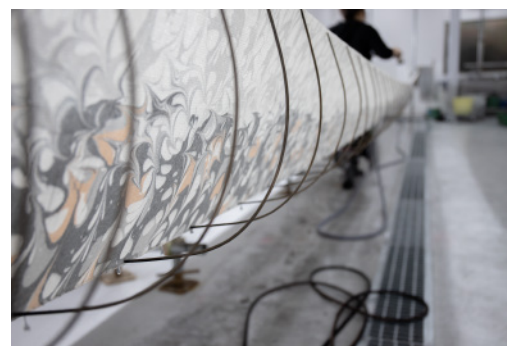
2 柄を描く

その後、竹串や振動、風を吹きかけ複雑な紋様を作っていきます。
生まれる模様は、力加減や振動の具合で変化するので、同じ模様が出来ることが無く世界に一つだけの柄ができ上がります。



3 生地を染める

生地を水面の模様上に浮かしていき静かに紋様を転写していきます。
一気に 17m の生地を染め上げるので、ムラができないように染め上げるのは、繊細な神経と熟練した技が必要です。



4 洗い流す

染め上がった生地は、染めムラができないように、静かに丁寧に、水面からあげ、余分な染料や糊を水をかけて流していきます。

商品アイテム

時代に合わせた色彩やデザインで染め上げています。



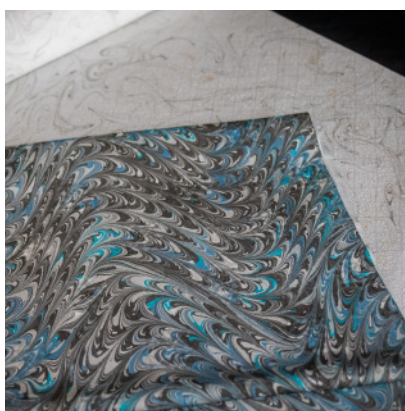
訪問着

セミフォーマルから、
カジュアルまで着用して
頂けるように柄付けして
います。



着尺

着物・コート・羽織と
幅広くご使用できるよ
うにデザインしています。



袋帯 名古屋帯

素材にこだわって作って
います。

例：博多織、両面帯など



小物

スカーフにも使用して
いただける様に柄や色に
こだわって染めています。

藤本 武史 *Takeshi Fujimoto*



墨流し作家、菌部染工総監督者

- | | |
|---------|---|
| 1968 年 | 京都の老舗の悉皆業の家に生まれる。 |
| 1988 年 | 京都の着物メーカーで着物の流通について学ぶ。 |
| 1993 年 | 実家の悉皆業に携わる。同時に菌部染工のもので、墨流しを研究。 |
| 2000 年～ | 墨流し技法を基に悉皆業で学んだ。
多くの染色を取り入れて独創的な作品を作り出す |
| 2016 年 | SKIIのクリスマス限定コフレの CM で墨流しを実演 |
| 2017 年 | 株式会社京朋の代表取締役社長の柳修司と共に、
新ブランド「こいこまち」を立ち上げる。 |
| 2020 年 | 二代目菌部染工を引き継ぐ。 |

消費者の声を聞き、反映したものづくりに取り組んでいる「成せばなる」をモットーに墨流しを研究し続けている

展示イメージ

会場に合わせたディスプレイをさせていただきます。



墨流し染体験イメージ

先生による実演、お客様の体験もすることが可能です。



ハンカチなどの
墨流しの染め体験も
行えます。

